

第四章

不慮の隙間

第四章 不慮の隙間

春休みがあつという間に終わり、多くの人はまだ休暇きゆうかの余韻に浸ひたっていて、授業中もダラダラとしていた。早朝、サブリナが廊下を歩いていると、誰かが風のように目の前をさっと通り抜け、ぶつかりそうになった。その人影はジャンナの教室に向かった。背中から見てレイラだと知り、なんとなく悪い予感を感じた。予想通り、二人は一日中形影相伴けいゐいあいともなう（¹）ように、くっついて離れず、授業の間もコンコン話が止まらない。

下校のチャイムが鳴ると、モニカが最初に教室から出て、ロッカーで素早く荷物の整理を終え、悠々と歩いてくるサブリーナに声をかけた。

「一緒に帰ろ」

「あ、ジャンナを待ってるから一緒に待とうよ」

と応える口調は強く、断る余地を与えなかった。

「しょうがないなあ、ジャンナ、多分先生に質問してるから、もうすぐ来るよ」

少し雑談をしていると、ジャンナは本当に現れ、少女は追いかけてようと歩き出した。そして、数歩離れたところで、スマホを取り出し、

(1) 形影相伴う 形とその影のように、いつも一緒にいるさま。

「ありがとうね」

と一緒に待ってくれたお礼のメッセージを送った。モニカはそれをチラッと目にし、去っていく二人の背中を見て少し微笑み、リュックを背負って帰っていった。

「で、その日、二人はまたどこかに行ったの？」

とエイヴリーは尋ねた。

「どこにも。ジャンナに追いついてから、道の曲がり角まで一緒に歩いただけ。それで家に帰った」

それを聞いてエイヴリーは何も言わずに、首を少し傾げ、座る姿勢を変えて、話を聞き続けた。

「その日用事があって。実は、春休み明けから、あまり一緒に
出かけてないの」

とサブリナは冷静に答え、翌日のある休憩時間のことについて語り始めた。

ジャンナはいつものように笑顔を咲かせながら返事をしていった。そこへレイラがやってきて、会話を遮り、ジャンナを引張って行った。話が中断されたサブリナは、瞬時に薔薇のような朗らかな笑みが消え、顔色も曇った。授業が終わり、二人は人混みの中でサブリナの後を歩いた。教室を出ると、レイラは待ちきれずジャンナの手を引き、サブリナを追い越して去って

第四章 不慮の隙間

行った。残された少女は一人ぼっちで遠ざかる背中を見送った。その時、開け放たれた窓から吹き込んだ風は、春和景明^{しゅんわけいめい}な季節にも関わらず、何となく寒々とした感じがした。

その後の数日間、ジャンナとレイラはずっと一緒に、他の人が口を挟む余地さえ与えなかった。近づく人がいると、レイラは炯々とした目でその人をじっと見つめ、それに加えて笑顔が全くない顔で、自分の領地に侵入^{しんにゅう}することは許せないと無言^{むげん}で伝えていた。

サブリナは様々な人々とやりとりして、社交^{しやうりやう}力を発揮し、中でも特にモニカと親しかった。ただ、いつもと違うのは休憩時間。教室にいるが、何度も振り向いてドアの向こうを望んだり、

第四章 不慮の隙間

ドアに凭^{もた}れて廊下を凝視^{ぎょうし}したりしていた。おそらく自分自身も気づいていないだろうが、心の中ですでにその女の子にフィルターをかけ、自分のことを下にしてしていたのだ。関係が不均^{ふきんこう}衡になると、心の距離はどんどん遠ざかるしかない。毎朝、希望を抱いて家を出て、一日中待ち焦^こがれても失望だけが返ってくるので、帰り道はへこんでいる顔ばかりだ。

その週の金曜日に、デラニーとの約束の日が来た。一週間の疲れを引きずって約束通りに校門前で待っていたが、相手は約束を反故^{はんこ}にした。問い詰めると、軽々しく言葉を残した。

「急に行きたくなくなったから。また今度、行こう」

校舎の外の優柔不断^{ゆうじゅうふだん}な雨を見て、サブリナは軽く頷いて立ち

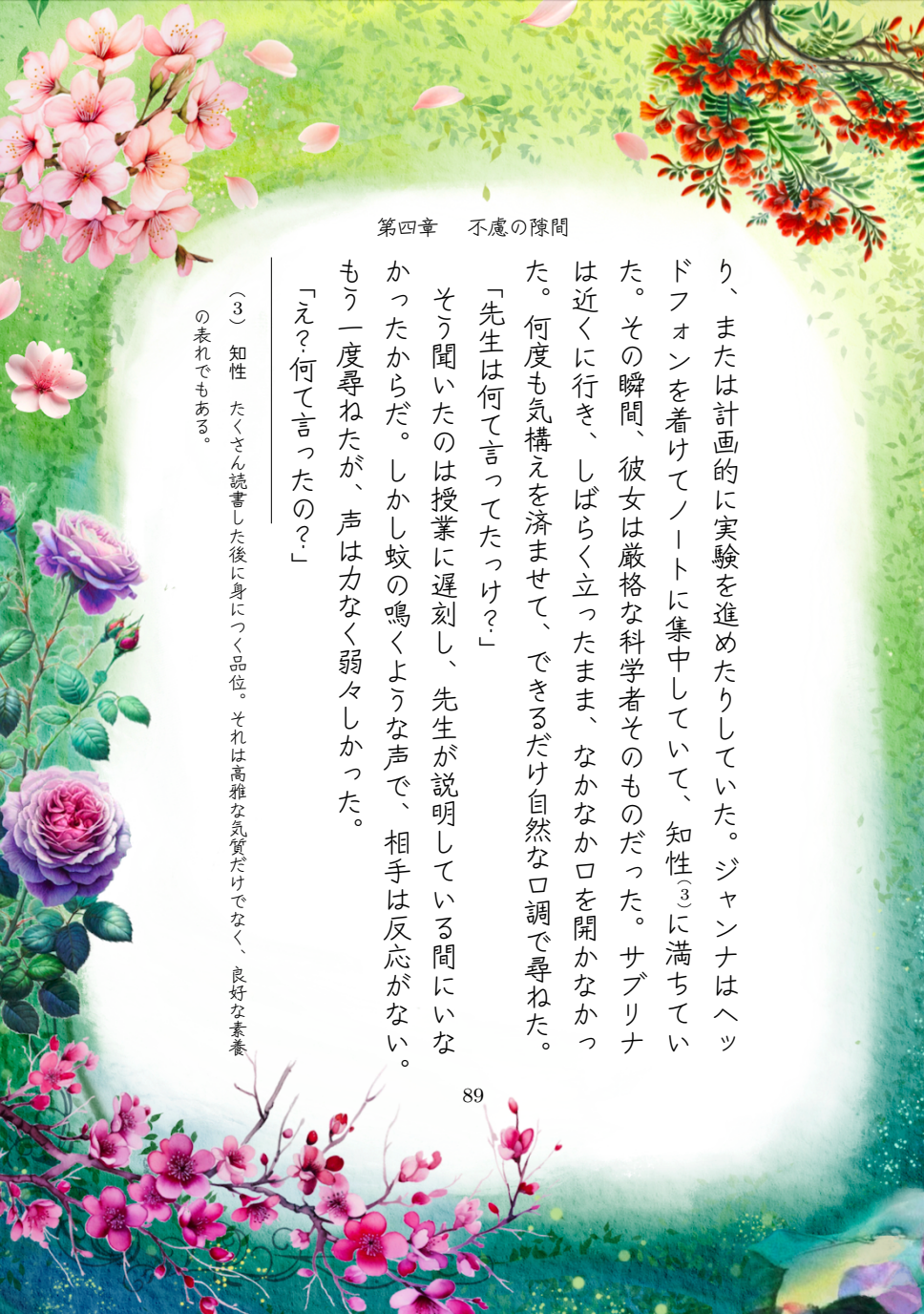
(2) 春和景明 春が穏やかて光が明るいこと。

第四章 不慮の隙間

去った。

春の雨はしとしとと、針のように斜めに降り続けた。雨滴が傘に滑り落ち、心の中の憂鬱ゆううつを洗い流していた。すっぱかされたことに気を取られる余裕はなく、この一週間のジャンナとの疏遠しゆんによって失意を感じていた。この友情が前例ぜんれいのない挑戦に直面していることをなんとなく感じていたが、どう対処すべきかわからず、次の週が良くなるように願うしかないのだ。

次の月曜日、科学の授業では、様々な試薬瓶しやくびんが漆黒しつこくの台の上に整然と並べられ、小さな化学の城きやうを築きずいていた。空気中には、淡い酸性和アルカリ臭が漂もよほっていて、それは知識の匂いだ。生徒たちは手順について話し合ったり、手際てぎわよく材料を準備した



第四章 不慮の隙間

り、または計画的に実験を進めたりしていた。ジャンナはヘッドフォンを着けてノートに集中していて、知性⁽³⁾に満ちていた。その瞬間、彼女は厳格な科学者そのものだった。サブリナは近くに行き、しばらく立ったまま、なかなか口を開かなかつた。何度も気構えを済ませて、できるだけ自然な口調で尋ねた。

「先生は何て言ってたっけ？」

そう聞いたのは授業に遅刻し、先生が説明している間にいなかったからだ。しかし蚊の鳴くような声で、相手は反応がない。もう一度尋ねたが、声は力なく弱々しかった。

「え？何て言ったの？」

(3) 知性 たくさん読書した後に身につく品位。それは高雅な気質だけでなく、良好な素養の表れでもある。

と女の子はヘッドフォンを外して振り向いた。ちょうどその時、レイラは二人の間に割り込み、机の上の物を整理し始めた。サブリナはがっかりして項垂れ、自分の席に戻るしかなかった。「やっぱ、おかしいよ。なんであいつ、二人の間に入ってきてさ。しかも居座ってるし」

と側で観ていたモニカは、いきどお憤ったように言った。

「レイラは私たちが話しているのに気づいていないのかも」

とサブリナは代わりに言い訳を探したが、自分自身さえその言葉を信じていなかった。

「あんなに明らかに話しているのにーうちは遠くからでも気づいたよ。サブリナを狙っていると思う」

「ありがとう、でも人をそんなに悪く言わないで……」

と平然なふりをして喋ったが、心の中の柔らかいところにか
重い陰が掛かり、その感情は自分にしかわからなかった。

夕方になって、サブリナはソファにだらりと座り、スマホを
見ていた。窓から春陽が桜を通して部屋に差し込み、奇妙な赤
い影を落としていた。ふとレイラのプロフィールを開くと、

「相手は友達ではありません。友達リクエストを送ってくだ
さい」

という文字が目飛び込んできた。これまでの出来事を思い
返し、きょうがく驚愕の余り、相手の行為を理解した。レイラを厭いとう気
持ちが一気に胸に湧き上がり、翌日モニカに会うと不満をぶち
まけた。ところが、万全の対策を考え出す前に、相手は先手せんてを
打ってきた。

第四章 不慮の隙間

「あの子、あなたのことは好きじゃないから。そう伝えてって
言われた。わかるよね」

と冷たい声が耳に入った。それはごく普通の昼休みで、サブ
リナはドアにもたれ、退屈そうにぼーっと廊下を見ていた。振
り向くと、対峙^{たいじ}してきたのはレイラだった。だから、話の中の
「あの子」が誰かはもはや言うまでもなかった。

「あなたには関係ないでしょ!」

と強情^{きやうじやう}になって、意地を張り、言った。

「とにかく、もう私たちの邪魔をしないで」

乙女はそう言い放つと、自分たちの教室に戻り、出てきた
ジャンナの手を取って、目の前を歩いて行った。それは、まる
で仲の良さを誇示^{こじ}するかのようだった。

壁には耳がある。エイヴリーは二人の会話を聞いて、事態が普通ではないと感じ、近寄って来た。

「サブリーナ、誰のことを言ってるの？誰に嫌われた？レイラは挑発してるよね」

少女はただ無表情で首を振りながら、呟いた。

「わかんない、本当のことなのかもしれない」

「もし言いたくないなら言わなくてもいいけど、一方的な言葉は信用できないよ。こういう好き嫌いのことは、やっぱり本人に確認して、話し合った方がいいと思う」

この話が適切なアドバイスであり、なおかつしつこくなかった。

学校が終わった後、サブリーナは何回も考えた末、ジャンナを

第四章 不慮の隙間

捕まえて、校舎の向かいにある建物で起きたことを細々と物語った。やはりエイヴリーの予想通りだった。ジャンナは昼休みの出来事について全く知らなかった。

「え、何!」

と、突然の話にびっくりして、声も半音上がった。そして、事態を理解しようとし、相手の言葉を繰り返した。

「レイラが話してきたって? いつのこと?」

「今日の昼休み」

「サブリナのことか嫌いだと伝えてって、私がそう言ったって
いうの?」

「うん。だからレイラにそうお願いしたのか聞きたいの」
その明瞭な言葉選びに対して、返事は曖昧だった。

「どうして……わ、私、私は……知らない。そんなこと……」
戸惑いながらも、うまく避けた。サブリナは、その困惑して
いる表情を見て心が少し落ち着き、

「本当に知らないの？」

と確認した。

「私、サブリナについて話したこと、ないよ」

状況を把握すると、ジャンナはレイラのために弁明^{べんめい}(4)しよう

とした。

「でも、彼女がそう言ったのは、ただ私と二人でいたいだけで、
他の子に邪魔されたくないだけだと思う。悪い人だと思わない
で。良い人だから」

(4) 弁明 言い訳をする。

第四章 不慮の隙間

懸命に擁護^{ようご}する発言を聴いて、サブリナは失笑^{しつしょう}し、そして思
わず口走^{くちばし}ってしまった。

「じゃジャンナもそう思ってる？二人が隣にいる時に話しかけ
たら邪魔になる？」

そう聞かれて女の子は苦悩しながら、しばらくすると黙って
頷いた。

「わかった！約束するよ」

と少女の声はだんだん弱くなり、その一言で力を使い果たし
たかのようだった。言い過ぎてしまったと感じたジャンナは話
を付け加えた。

「でも、大したことではないし、私の気持ちをそんなに気に
しなくてもいいよ。サブリナはちよっと考え過ぎているじゃ

ない?」

「私……」

「私たちはLINEで話そう」

「でも、メッセージ送っても返信来ないじゃない」

「最近のこと?」ここ数日はすごく忙しいの。本当に空いてなくて。例えば今日は宿題でレポートがあつて、プリントもある……それに明日はテストがあるし、私……」

その答えを聞いて、サブリナの不安は少し和^{やわ}らいだ。

「ジャンナがそう言ったなら、安心なんじゃない?」
エイヴリーが少女の思考を遮った。

「いや、その日から私はビクビクと色々考えるようになって、迷惑かけちゃうんじゃないかいつも気を使ってた」

「レイラのせいだね、本当に嫌なやつ。前にも、レイラのことを私に話したよね、礼儀知らずって」

「う……」

と溜めながら声が低くなり、

「覚えてる。悪かった。前は悪口を言おうとしても名前は出さないのに」

と自己嫌悪に陥った。胸に手を合わせて懺悔し、テーブルの上の閉まった封筒を持ち上げて矯めつ眇めつ眺めた。封筒の表裏には何も書いていなかったが、光に翳すと中の手紙の最上部に書かれている文字がわずかに透けて見えた。

第四章 不慮の隙間

「レイラへ」と。

ジャンナとの会話は、確かに二人の関係をいくらか緩和かんわさせた。サブリナは再びあの桜並木の小道を通った。一ヶ月前、女の子とこの小道を並んで歩いた時には、まだ桜が咲いておらず、枝には花蕾からいがいくつかあった。だが今では、木には新芽しんめが出ていて、枝には零細な花弁が掛かっているだけだった。その大半の花弁は先端が紫色に染まり、地面に散らばって、川面かわもに漂ただよっていた。河水は落桜を巻き込んで流れ、切ない美しさを演出えんしゅつしていた。

(5) 花蕾 枝の先端にできるつばみのこと

第四章 不慮の隙間

ぼんやりとしていると、遠くないところに、青紫色の蝶の群れが低く飛び、緑の茎の周りを旋回せんかいしているように見えた。目を据えると、それは蝶ではなく、川岸かわぎしに咲いている何房かの鳶尾いちはつの花だった。その亭々ていていとした茎の上には、蝶の羽みたいな花が堂々と立っている。少女の心に、二月の寒冬に全力で飛ばたく蝶と、その蝶が指先に止まった女の子のことが蘇もよほってきた。足は無意識にその鳶尾に向かっていた。そして蹲しゃがみ込み、土表面の小石をペロリと剥がし、その花群はなぐんのうちの一輪の花の根を土と共に手のひらに取り、立ち上がった。それは地味で深遠な青色の鳶尾の花だ。その花卉の模様は、沈黙の涙のように、誰もが知らない秘められた想いと、心の奥深くに隠された秘密を静かに語っていた。ゆっくりと遠くの小橋に視線を移し、

第四章 不慮の隙間

橋を行き交^かう人々を眺めた。中にはジャンナとレイラの姿もあるように見えた。彼女はジャンナとの承諾^{しょうだく}を覚えており、実際にそれを守っていた。だから、その日から、二人が話している時に近づくことさえしなくなった。

(6) 鳶尾 四月から五月頃に咲くあやめ科の多年生植物。